

台湾語話者とその日本語の発音

阿久津 智

要 旨

台湾語話者の日本語の発音には、台湾語の音韻体系に基づくと思われる、いくつかの傾向が見られる。特に、清濁の混乱、濁音とマ行、ナ行、ラ行音との混乱、促音や撥音や長音の脱落や挿入、アクセントの誤りなどの問題が顕著である。また、台湾社会の変化や中国共通語の普及により、台湾の言語生活や台湾語自身が変化してきていることも、台湾語話者の日本語の発音を考える際に、見逃せない問題である。

〔キーワード〕 台湾語話者 台湾語の音韻 台湾語話者の日本語

1. はじめに

日本語を学習する外国人の中で中国人の占める割合は大きい。1988年上半期（1～6月）に新規に入国した留学生の国籍をみると、中国（大陸）と中国（台湾）とが、それぞれ、31.4%（789人）、29.0%（729人）を占めている。また、就学生については、それぞれ、78.9%（13062人）、3.6%（601人）を占めている。中国（大陸）からの就学生は前年（855人）の15倍に増えている¹⁾。

しかし、一口に中国といっても、その面積はヨーロッパに匹敵し、人口は10億を越え、民族の数も56を数える。人口の9割以上を占める漢民族にしても、方言差が非常に大きい。今日では、北方方言を基礎にした中国共通語が全国で通じるが、北方方言以外の方言は、他の地方では通じにくい。王（1960）によれば、北京方言とアモイ方言との関係は、英語とドイツ語以上に疎遠であるという。このため中国共通語を話す場合にも、程度の差こそあれ、方言色が出てくる。このことは中国人が話す日本語についてもいえる。同じ中国人でも出身地により、その日本語に異なった傾向が見られるのである。例えば、一部の地域を除いた北方方言の話者は、「キ」の発音が「チ」になりやすく、海南島文昌方言の話者は、ハ行音と語頭にたつカ行、タ行音とが混乱しやすい。これらは、それぞれの方言の音韻体系に/khi/または/ki/, /kh/および/th/（hは有気音を表す）がないことによるものと思われる。このような出身地の違いによる発音の傾向の違いはしばしば見られる。

ところが、これまで中国語話者の日本語の傾向というとき、中国共通語を基にして言われることが多く、方言レベルで論じられることは、広東方言以外は、非常に少なかったように思う。しかし、実際には、中国各地の出身者が日本語を学習している。中国南方出身者で日本に留学に来る者も急増しているし、台湾からの留学生も相変わらず多いのである。中国語話者の日本語の傾向は、方言レベルで論じられなければならない。もちろんそれは、発音に限らず、文法においても語彙においてもである。また、その際、中国共通語の普及により、方言地区の言語生活が変化してきていることも考えていかなければならないだろう。

この論文では、台湾社会の変貌に伴う言語生活の変化も考えながら、台湾語話者とその発音についてみていきたいと思う。

2. 台湾の言語事情

台湾は多言語社会である。台湾で行われている言語は、漢民族の言語、すなわち中国語と、先住民である高山族（高砂族）の言語とに大別できる。

高山族の言語は、マライポリネシア語族インドネシア語派に属する言語で、中国語とは系統を異にする。高山族は、さらに、タイヤル、サイセツ、ブヌン、ツォウ、パイワン、ヤミ、ルカイ、ピュア、サオの部族に分かれ、各部族で言語が異なるため、部族間の共通語としては、日本語または国語（中国共通語。以下「国語」と呼ぶ）が使われる。

中国語では、閩南方言、客家方言が広く行われている。特に閩南方言の使用者は、台湾の人口の約7割を占める²⁾。いわゆる台湾語とは、この台湾で行われている閩南方言のことを指す。この論文でいう台湾語も閩南方言のことである。

また、このほかに、戦後、国語として中国共通語が非常に普及した。この国語の普及により、戦後大陸から台湾に渡ってきた家庭（いわゆる外省人）以外の出身の者（いわゆる本省人）でも、国語を第一言語とする者が多くなってきている。この傾向は、台北で顕著に見られる。洪（1985）は、台湾語話者の話す台湾語なまりの国語を「台湾国語」と呼び、国語を第一言語とする者の話す国語を「台北国語」と呼んで区別している³⁾。台北国語話者には台湾語を話せない者が多い。また、台湾語話者でも、純粋の台湾語だけで話ができる者は少なく、話の中に国語の単語が混ざることが多い。これは、学校で台湾語の教育が全く行われていないためである。

このほか、かつての「国語」である日本語が台湾の言語に与えた影響は少なくない。日本語はさらに、台湾語を通して、台湾の国語にまで影響を与えているのである。例えば、「弁当」のことを、台湾語で「便当 pian7 tong1」と言い、台湾の国語でも「便当 bian4 dang1」と言うが、これは日本語から入ったものである（「弁（辨）」と「便」は同音。ローマ字表記は、台湾語は教会式、国語は大陸の漢語拼音方案を用いる。数字は声調）。大陸の国語（漢語普通話）では、「便当」に「弁当」の意味はない。

このように、台湾語は、日本語と国語の影響を強く受けてきた。また、台湾の国語も、台湾語の影響を受けてきているのである。

3. 台湾語

台湾語は、福建省南部（閩南）から台湾に渡ってきた人々が、もたらした言語である。

閩南方言は、唐代初めまでに福建省に移り住んだ人たちの言語の上に、唐代末の閩王国成立時に中原からやってきた人々の言語や、南宋時代の移民の言語が重なってできたものであるという。そして、今日、白話音と呼ばれている音は、唐代初めまでの移民の言語の系統をひくもので、文言音

と呼ばれている音は、閩王国成立時または南宋時代の移民の言語の系統をひくものであるという⁴⁾。白話音、文言音について例を挙げると、「開門」の「開」は「khui1」というが、「開始」の「開」は「khai1」という。「khui1」は白話音、「khui1」は文言音である。「khui1」も「khai1」も、漢字では「開」と書かれる同源の語（正確には形態素）である。

かつては台湾でも、文章はこの文言音で読まれていた。しかし、今日では国語音で読まれるようになったため、文章を文言音で読むことのできる者は非常に少なくなった。一方、白話音は文章を読む場合に使われなかったため、当てるべき漢字がわからない場合が多い。そこで、白話音の語を漢字表記したいときには、意味の同じ漢字を当てることが多い。すなわち、訓である。例えば、「人」と書いて、「lang5」と読むのは訓読みというべきものである。「lang5」の本字は、「農」または「郎」であるという⁵⁾。台湾語の漢字表記には、このような訓や当て字が多く見られる。その他、表音表記として、教会式ローマ字等があるが、一般的ではない。台湾語には一般に確立した表記体系がないのである。

さて、閩南方言を台湾に伝えたのは、主に福建省の泉州、漳州の人たちである。台湾語は、主に泉州方言と漳州方言とが混合して成立したものである。台湾語は福建省のアモイ方言と非常によく似ているが、それはアモイ方言も泉州方言と漳州方言とが混合して成立したものだからである。アモイ方言は、今日閩南方言の標準語とされている。今日の台湾語にも、泉州方言の要素の強いものと、漳州方言の要素の強いものがある。前者は「泉州腔」と呼ばれ、後者は「漳州腔」と呼ばれる。例えば、台北の台湾語は主に泉州腔で、台南の台湾語は漳州腔である。高雄は泉州腔の地区であるが、筆者が聞く高雄出身者の発音は主に漳州腔のようである。泉州腔の地区と漳州腔の地区は混在しているが、全体としては泉州腔のほうが優勢である。しかし、今日、両者の混合はさらに進んでいるという。

台湾語が話せない者や、台湾語も国語もあまりうまくない者が増えてきたことについては前節でも述べたが、このことは今日の台湾の社会問題にもなっている。台湾語の教育を望む声も大きくなっているようである。一口に「台湾語話者」といっても、その台湾語力は人により相当の違いがある。この論文では、このような台湾の言語事情を考えながら、論を進めていきたいと思う。

4. 台湾の音韻、音声

中国語の音節構造は、伝統的に次のように分けて考えられる。

声母 (Initial)	韻母(Final)		
	介音 (Medial)	主要母音 (Main Vowel)	韻尾 (Ending)
	声調(Tone)		

例えば、国語の「娘 niang2」の声母、韻母は、それぞれ、「n」「iang」である。介音、主要母音、韻尾は、それぞれ「i」「a」「ng」である。また、声調は第2声（陽平声。上昇調）である。

以下、この枠組みを用いて、台湾語の音韻、音声を見ていく。国語（音韻、音声は北京方言を標準とする）の音韻、音声についてもふれたのは、国語と対照する意味もあるが、国語が台湾語の音韻、音声の変化に影響を与えている部分もあるのではないかと考えたからである。特に、若い台北人の話す台湾語には、国語の影響が強いのではないかと思う。台湾語なまりの、いわゆる台湾国語の音韻、音声についてはここではふれない。

//は音韻，□ は音声，「」はローマ字表記（台湾語は教会式。国語は大陸の漢語拼音方案）である。台湾語の鼻化母音は、王（1982）にならい「N」で表すことにする⁶⁾。

4.1 声母

/p/ 「p」	/ph/ 「ph」	/b/ 「b」～「m」
/t/ 「t」	/th/ 「th」	/l/ 「l」～「n」
/k/ 「k」	/kh/ 「kh」	/g/ 「g」～「ng」
/c/ 「ch」	/ch/ 「chh」	(/j/ 「j」) /s/ 「s」
/·/ 無表記	/h/ 「h」	

/p/, /t/, /k/, /c/, は無気音，/ph/, /th/, /kh/, /ch/は有気音。無気音と有気音の対立は国語にもあるが、音声としては多少異なる。国語の無気音が⁷⁾，精密には [b], [d], [g], … ([.] は無声化を表す) などと表記すべき軟らかい音であるのに対して、台湾語のものはやや硬い。これは、/b/, /l/, /g/とはっきり区別するためであろう。このため、台湾語の無気音と有気音は聞き分けにくい。

/b/, /l/, /g/は、それぞれ、[b] と [m], [l] と [n], [g] と [ŋ] という異音を持つ。[b], [l], [g] は非鼻化母音の前に、[m], [n], [ŋ] は鼻化母音の前に現れる。[b], [g] は精密には [mb], [ŋg] と表記すべき鼻音性のわたりを伴った音で、非常に破裂が弱い。[l] も鼻音性のわたりを伴った音であるが、精密には [nl] と [nd] との間というべき音である。台湾語話者には、[b] と [m], [d] と [n] と [l], [g] と [ŋ] の区別ができない者が少なくない。国語には、/m/, /n/, /l/があるが、[b], [d] のような異音は持たない。[b], [d], [g] は、/p/ (「b」), /t/ (「d」), /k/ (「g」) の自由変異音として、語中等で聞かれることがあるだけである。しかし、台湾語の/b/, /l/, /g/も、その弁別の特徴を、無声：有聲の対立ではなく、非鼻音性：鼻音性の対立に求めることもあるいはできるかもしれない。このことと日本語の清濁との問題については次節で考える。

/c/, /ch/, /j/, /s/は、それぞれ [ts] と [tɕ], [tsʰ] と [tɕʰ], [dz] と [dʒ], [s] と

[ɕ] の異音を持つ。[ts] [ts'] [dz] [s] は [i] 以外の母音の前に現れ, [tɕ], [tɕ'], [dʒ], [ɕ] は [i] の前に現れる。国語の「z」([ts]) と「j」([tɕ]), 「c」([ts']) と「q」([tɕ']), 「s」([s]) と「x」([ɕ]) も同様の異音の関係にある。日本語でも, 「シ」「チ」「ジ」は口蓋化して, [ɕi], [tɕi], [dʒi] に近い音になっている。

/j/ は, これを持たない地区も多い。台南では /j/ は /l/ に合流している。台北でも, /l/ に合流するところが多い。また, 屏東等では, /j/ は [g] と発音される。

/ɸ/ は零声母である。声門破裂や喉頭の緊張が見られる。

/h/ は ([h]) は国語の /h/ ([x]) のような強い摩擦音ではない。

4. 2 韻母

・介音	/i/ 「i」	/u/ 「u」		
・主要母音	/a/ 「a」	/e/ 「e」	/ɔ/ 「o」	/o/ 「o」
	/i/ 「i」	/u/ 「u」		
	/ɸ/ 無表記			
	/N/ 「N」			
・韻尾	/i/ 「i」	/u/ 「u」		
	/m/ 「m」	/n/ 「n」	/ŋ/ 「ng」	
	/p/ 「p」	/t/ 「t」	/k/ 「k」	/h/ 「h」

/e/ は国語にはないが, 台湾語にはある。北方方言話者には [e] の発音が難しいが, 台湾語話者にはそれほど難しくない。

/ɔ/ は [ɔ], /o/ は [o] であるが, 台南などでは /o/ が [ʏ] と発音され, そのぶん /ɔ/ が [o] に近づいている。[ʏ] は国語の「e」(「餓」の母音) に近い。/ɔ/, /o/ は国語にはない。国語の「bo」, 「po」, 「mo」, 「fo」の韻母は, 音韻論的解釈では /ɸ/ であり, 標準的な音声では [uɔ] というわたりを持つ音である。

/i/, /u/ は, 伝統的な音韻学では主要母音にたてないが, 今日の台湾語の音韻論では, 介音, 韻尾の /i/, /u/ とは別に, 主要母音にもたてることがあるようである。ここでは, 介音, 主要母音, 韻尾とも同じ音素記号を使っておく。

/ɸ/ は, 韻母の音韻論的解釈のために, 樋口 (1978a) によってたてた。/ɸ/ のみの韻母は存在しない。/ɸ/ は, 「un」/uən/ などと比較的顕著に聞かれる。台湾語話者は, 「新聞」の「ぶん」を [buən] と発音しやすい (この傾向は, 北方方言話者にも見られる)。

/p/, /t/, /k/ は, それぞれ, /m/, /n/, /ŋ/ に対応する, 入声韻尾と言われる音である。/m/, /n/, /ŋ/ は, 陽声韻尾と言われる。ともに, 外破させない音である。/p/, /t/, /k/,

/m/の韻尾は、国語にはない。

/h/は声門閉鎖〔ʔ〕を表す。これも入声韻尾で、国語にはない。

/p/, /t/, /k/, /h/は、それぞれ、/m/, /n/, /ng/, 零韻尾の、声調の違いによる異音と解釈することも可能だが、ここでは、韻尾音素としてたてておく。

/N/は母音の鼻音化を表す。これも国語にはないが、音声としては/ng/韻尾を持つ韻母がr化したときに、母音の鼻音化が起こる。

以上の、介音、主要母音、韻尾により韻母が構成されるわけだが、考えられるすべての組み合わせが存在するわけではない。例えば、介音/i/と/e/、介音/u/と/o/, /o/は結びつかない。それでも、韻母の数は国語よりずっと多い。

鼻 化	介 音	母 音	韻 尾 ()内は入声					
			/o(h)/	/i(ih)/	/u(uh)/	/m(p)/	/n(t)/	/ng(k)/
-	0 /i/ /u/	/a/	a(ah) ia(iah) oa(oah)	ai oai(oaih)	au(auh) iau(iauh)	am(ap) iam(iap)	an(at) ian(iat) oan(oat)	ang(ak) iang(iak)
+	0 /i/ /u/		aN(ahN) iaN(iahN) oaN	aiN oaiN(oaihN)	auN(auhN) iauN			
-	0 /u/	/e/	e(eh) oe(oeh)					
+	0		eN(ehN)					
-	0 /i/	/ɔ/	ȯ					ong(ok) iong(iok)
+	0		ȯN					
-	0 /i/	/o/	o(oh) io(ioh)					
-	0 /i/ /u/	/ə/		ui(uih)	iu(iuh)	m(mh) im(ip)	in(it) un(ut)	ng(ngh) eng(ek)
+	/i/				iuN			
-	/i/		i(ih)					
+			iN(ihN)					
-	/u/		u(uh)					

上に挙げたものは、韻母の一覧表である。韻母の音韻論的解釈は、声母ほど簡単ではない。この表は、先行研究を参考にして、作成したものである。介音、母音、韻尾の枠以外は、教会式ローマ

字表記である。個々の音声については、ここではふれない。地域によっては、この表以外の音もあるようである。

4. 3 声調

- ・第1声（陰平声） 高平調→中平調
- ・第2声（上声） 下降調→高平調
- ・第3声（陰去声） 低平調→下降調
- ・第4声（陰入声） 中促調→高促調（/-p/、/-t/、/-k/），下降調（/-h/）
- ・第5声（陽平声） 上昇調→中平調
- ・第7声（陽去声） 中平調→低平調
- ・第8声（陽入声） 高促調→低促調（/-p/、/-t/、/-k/），低平調（/-h/）

（ ）内は、伝統的な音韻学における、声調分類（調類）の名称である。この名称は歴史的なものであって、実際の調値を表すものではない。各調類の調値は、その特徴のみを挙げた。ここで特徴としたのは、高低と短促か否かのみであるが、強弱も合わせて考えるべきかもしれない。この論文では、声調は、1～8の数字を用いて示した。第6声がないのは、第2声に合流してしまったからである。→は転調を示す。転調とは、本来の調値が語中や文中で別の調値に変わることをいう。例えば、「我 goa2」は、一語では下降調に発音されるが、文中ではふつう高平調に発音される。

入声（第4声、第8声）は、韻尾の違いにより、転調のしかたが違う。/-h/のものは転調すると、声門閉鎖を伴わなくなり、入声らしさを失う。/-h/の第4声は、下降調のほかに高平調に転調することもある。

国語の声調との大きな違いは、入声を持つことと、転調が常に起こることである。台湾語は入声を持つこともあって、音節が短めに聞こえ、文に国語のような流れるメロディーという感じがしない。転調については、台湾語話者は、台湾語に関する教育を受けていないこともあってか、ほとんど気づいていないようである。

声調の調値にも多少の地域差がある。例えば、台北（泉州腔）では、第5声が、上昇調→低平調のように転調する。

中国語では、声母、韻母、声調により、音節が構成されるが、ふつう一音節で一語（正確には形態素）になる。そのため、中国語は単音節語と言われる。中国語話者の音節に対する意識は複音節語話者である我々とは大いに違う。このことが、彼らの日本語の発音に与える影響は大きいのではないだろうか。また、音節構造の違いから来る日本語の発音に対する困難も大きいと思う。例えば、台湾語話者は促音といえる入声音を持っているが、日本語の促音の発音は必ずしもよくない。これ

は、日本人が持っている、促音を一拍とする拍感覚を彼らが持っていないからであろう。また、台湾語話者は、自分の母語である台湾語に関する教育を受けていないために、台湾語を反省することがあまりないということも日本語の聞き取りを悪くする原因の一つになっているかもしれない。以上のようなことを考えながら、次節では台湾語話者の日本語の発音について見ていきたい。

5. 台湾語話者の日本語の発音

5.1 清濁とナ行、マ行、ラ行音

まず、子音に関する問題として、清濁の混乱と、濁音とナ行、マ行、ラ行音との混乱について考える。

清濁の混乱は、北方方言話者にもよく起こるが、それは北方方言（すなわち国語）の音韻体系には、有声であることを弁別の特徴とする、/b/、/d/、/g/のような子音音素がないためだと考えられる。一方、台湾語には、子音音素として、/b/、/g/があり、当然、清濁の混乱は起こりにくいと期待される。しかし、実際にはこの混乱はよく起こる。ただ、特にタ行とダ行の混乱が多いのは、やはり/d/がないことによるのであろう。

清濁の混乱にはいくつかの原因が考えられる。一つは、前節の声母のところで述べたように、/b/と/p/とは、有声であるだけで区別されているのではないかもしれないということである。つまり、より实际的に言えば、鼻音性有声：非鼻音性無声の対立により、/b/と/p/は区別されているのではないだろうか。/l/と/t/、/g/と/k/も同様である。ただし、音韻論的に、有声：無声、鼻音性：非鼻音性のどちらを弁別の特徴として解釈するかは、また別問題である。鼻音性有声：非鼻音性無声の対立という点からすると、日本語の濁音は、ガ行鼻濁音を除き、ふつう非鼻音性のやや閉鎖の強い有声音であるため、台湾語話者にはうまくとらえられないことになる。例えば、日本語のパ行子音は、有声という点からは/b/のようであるが、非鼻音性という点からは/p/のようでもある、ということになる。ただ、パ行音を容易に真似して発音できることや、パ行音がマ行音と紛れやすいことなどからすると、台湾語話者は、パ行子音を/b/として聞くことのほうが多いようである。清濁の聞き分けの難しさは、さらに次のことにもよるのであろう。

それは、日本語の清音は音声的に、語頭ではふつう有気音であるが、語中、語尾では無気音になることも多い、ということである。特に促音の直後の音は、ふつう無気音である。このことが、さらに混乱を大きくするようである。パ行を例にとって説明する。有気のパ行子音を、彼らは/ph/として聞く。これはあまり問題はない。彼らが/ph/として聞いたものは、常にパ行仮名で書かれるからだ。問題は無気のパ行子音である。彼らはこれを/p/として聞く。しかし、すでに述べたように、彼らはパ行子音も/p/で聞くことがある。つまり、彼らが/p/と聞くものには、パ行音とバ行音があることになり、混乱が起きる。台湾語話者の清濁の混乱は、このようにして起きるのではないだろうか。

次に、バ行音とマ行音、ダ行音とナ行音とラ行音の混乱について述べる。これは前節で述べたように、[b] と [m], [l] または [d] と [n] が、それぞれ /b/, /l/ の条件異音の関係にあるということに原因があると考えられる。[m], [n] は鼻化母音の前に現れ、[b], [l] または [d] はそれ以外の環境に現れるというが、後者も、特に陽声韻尾を持つ音節では、「鼻の詰まったマ行、ナ行音」といった感じの発音になることが多いようだ。彼らは、バ行とマ行の子音、ダ行(「ダ」, 「デ」, 「ド」) とナ行とラ行の子音を、それぞれ一つの音素、/b/, /l/ として聞いてしまうため、混乱を起こすと考えられる。「バ」を、なんとか「マ」と発音しまいとして、結局「バ」と発音してしまう者もいる。もっとも、国語の影響であろうか、[l] と [n] などをきちんと区別して発音できる者も多くなってきているようだ。

このほか、「チ」と「ジ」, 「ツ」と「ズ」の発音の区別は、彼らにとって特に難しいようである。地域によっては /j/ を持っているところもあるが、この /j/ は /l/ と合流することが多いことからわかるように、/l/ に近い音である。このため、/j/ を持つ地域の者でも、「チ」と「ジ」, 「ツ」と「ズ」の発音の区別は難しいようである。

5. 2 促音、撥音、長音

台湾語話者にディクテーションさせると、促音や撥音や長音の脱落や挿入といった誤りが大変多い。前節で述べたように、台湾語には、短促音というべき入声韻尾や、撥音というべき陽声韻尾があるのにである。これは、次のアクセントの問題とも関連することであるが、日本語と台湾語の音節構造の違いに原因するものであろう。日本人は、促音、撥音、長音を、それだけで一音節(ここでの音節とは音韻論的なもので、「拍」のこと)として聞くが、台湾語話者は、これらを直前の音と合わせて一音節として聞いてしまう。連母音も同様に一音節として聞くようである。例えば、「きっぷ」, 「えいご」, 「りんご」, 「きかい」などの単語を、台湾語話者は二音節として聞くようだ。このため、彼らは、これらの単語を発音するときも二音節に発音する。この発音は、我々の耳には、促音、撥音、長音などが十分に響かず、おかしく聞こえる。彼らの変な発音の原因は、こういうところにあると考えられる。しかし、たとえ彼らが、二拍を一音節に聞こうと、台湾語の音節は、韻尾として、日本語の促音、撥音などに当たるようなものを持っているのであるから、聞き分けはできて当然のように思われる。ところが、実際にはこれも難しい。彼らは、一音節を全体的なまとまりとしてしかとらえられないようだ。自身の言語を反省することがないので、韻尾だけを取り出すことが難しいのであろう。例えば /ian/ と /iang/ の区別は /n/ と /ng/ だけによるのではなく、全体としての違い、特に聞えの明瞭な主要母音の音声的な違い (/ian/ は、[en] と発音されることが多い) によってなされているようである。もっとも、日本語などの外国語を勉強したことによって、台湾語の音節構造を反省できるようになる者もいるようである。

5.3 アクセント

台湾語話者のアクセントで特に気になる点は、2拍の単語が頭高型になりやすいことと、平板型の発音ができないことである。

洪(1985)によると、台湾語話者は、日本語のアクセントを台湾語の声調に合わせてとらえるため、その日本語のアクセントには、次のような傾向が見られるという(アクセントの表記法は改めた)。

- ・長音、連母音、撥音を含まない単語(促音は直前の拍とともに一音節になる)

- ・2拍の単語

高平+中促

例 アメ、ハナ。

- ・3拍以上の単語

中平+高平+…+高平+中促

例 ココロ、ホテル、アメリカ。

- ・長音、連母音、撥音を含む単語(長音、撥音は、直前の拍とともに一音節になる。連母音は一音節になる。___部が一音節になったところ。これ以外の部分は上の規則による)

- ・長音、撥音、連母音の第二母音が第2拍に来る場合

上昇+…

例 コーモリ、コンクリート。

- ・長音等が最後の拍に来る場合

…+下降

例 オジサン、トーキョー。

- ・長音等が最後から第2拍に来る場合

…+下降+低平

例 サンマ、イモート。

- ・長音等が中間に来る場合

…+高平+…

例 サンフランシスコ。

洪氏が観察したのは、国語として日本語を学んだ者のアクセントのようであるが、これは現在の日本語学習者にもそのまま当てはまるように思う。2拍の単語が頭高型になる点や、平板型の発音がない点などが、ここにも現れている。

上からうかがえる主な傾向は、最後から第2拍から最後の拍にかけて下がるということである。ただし、最後から第2拍が長音等の場合のみ、最後から第3拍から第2拍にかけて下がる。この傾向が、台湾語の音節ではなく拍によっているのは、洪氏によれば、文字(仮名)に頼って発音されるためだという。それでも、やはり実際には、台湾語話者は長音等を一拍に発音することができないため、長音等は直前の拍とともに一音節に発音されている。

洪氏は、日本語と台湾語のアクセントの相違点として、次の2点を挙げている。1.日本語は複音節語であり、音節間の相対的な高低がアクセントになるが、台湾語は単音節語であり、音節内部に声調を持つ。2.日本語のアクセントは高低の二段階式であるが、台湾語の声調は高中低の三段階式

である。以上の2点が、台湾語話者にとって、日本語のアクセントが難しいことの主な原因であるという。台湾語話者は、日本語の高低アクセントを、台湾語の声調の枠組みでとらえているわけである。

それにしても、なぜ上のような傾向が出てくるのであろうか。これについて、謝(1980)は、台湾語の転調の影響であるとしている。台湾語話者は、日本語の仮名一字を読むとき、台湾語の第4声(中促調)のように読むが、仮名連続を読むときには、最後の一字以外を転調させ、高平調に読む。仮名三文字以上の単語の場合は、後に続く高い音節を発音しやすくするため、最初の一字を中平調に読む。このようなことから、上のようなアクセント型が現れるのだという。

単音節語、声調言語を母語とする者には、日本語の高低アクセントはとらえにくいもののようにある。

6. おわりに

以上、台湾語話者とその日本語の発音の傾向について見てきた。今後はさらに具体例を集めて、細かい問題や、発音矯正の方法などについて考えていきたい。また、台湾の言語生活や台湾語自身の変化についても、さらに研究されなければならない問題であると思う。

注

- 1) 財入管協会『国際人流』17号(1988. 10)による。
- 2) 載(1988) p.13によれば、閩南語群が台湾の総人口の74.51%を占めるという。
- 3) 洪(1985) p.194は、「台北国語」の使用総人口は400万人を越えるだろうという。これは台湾の総人口の2割以上に当たる。
- 4) 王(1960), 鄭(1987) p.16-17による。
- 5) 鄭(1987) p.10による。
- 6) 以下に挙げる参考文献に主としてよったが、筆者自身の観察によるものもある。筆者が観察したのは、主に東京外語専門学校日本語科の台湾人留学生たちの発音である(日本語も同じ)。

参考文献

1. 牛島徳次他(1967)『中国文化叢書 1 言語』大修館書店
2. 王育徳(1960)「中国五大方言の分裂年代の言語年代学的試探」『言語研究』28号 日本言語学会
3. 王育徳(1982)『台湾語入門』日中出版
4. 王育徳(1987)『台湾語音の歴史的研究』第一書房
5. 謝逸郎(1980)「台湾流日本語のアクセントについての考察ー日本語教育との関連においてー」『外国人と日本語』5号 筑波大学文芸・言語学系内外国人に対する日本語教育プロジェクト

6. 載國輝 (1988)『台湾－人間・歴史・心性－』岩波書店
7. 樋口靖 (1978 a)「台湾語の音節構造について」『言語文化論集』3号 筑波大学現代語・現代文化学系
8. 樋口靖 (1978 b)「台湾語の声調体系」『言語文化論集』4号 筑波大学現代語・現代文化学系
9. 樋口靖 (1985)「台湾の「国語」をめぐる二、三の問題について」『外国語教育論集』7号 筑波大学外国語センター
10. 袁家驊他 (1960)『漢語方言概要』文字改革出版社
11. 鄭良偉他 (1977)『台灣福建話的語音結構及標音法』學生書局
12. 鄭良偉 (1987)『從國語看臺語的發音』學生書局
13. 丁邦新 (1979)『臺灣語言源流』學生書局
14. 張振興 (1983)『臺灣閩南方言記略』福建人民出版社
15. 洪惟仁 (1985)『臺灣河佬語聲調研究』自立晚報
16. 厦門大学中国語言文学研究所漢語方言研究室 (1981)『普通話閩南方言詞典』三聯書店